

# 幼児研究の仕方

園稚らくさき谷鷺谷 謹

平 康 村 松



## 問題

かばう氣持が、事實のありのままの姿をくもらせること。事實を受け容れるためには勇氣が必要であり、また、誠實であり謙遜でなければいけないこと。感じる心を鈍らせたり、あたたかい氣持を失うのは、科學的に生きる道からはずれていることなど。具體的に前號で述べてみたが、研究に必要な心構えの理解に少しは役立つたであろうか。理解はしたけれど、それが餘り役立つようには感じられない。理解はしたが、それをどのように役立てたらよいのか、どのように研究を進めたらよいのかと、疑問にされた讀者がおられるだろうか。そういう方々にはここで更めて申し上げるまでもないのだが、これらのことが、これから取り扱おうとする問題なのである。

## 役立たぬ理解

理解はしたけれど役に立たぬという、そのような理解の仕方があるものなのだろう

うか。このことについて考えてみよう。幼児教育の大切なことが強調されるところでは、殆どきまつて、自發性を尊重しなればいけないと言われる。最近では社會化の訓練ということも併せ說かれる向きが多いけれど、幼児教育にたずさわる人なら、誰をとらえても、自發性の尊重を幼児教育の主眼に敷えいれるとみて、間違いはあるまい。自發性という言葉の意味は、人により違つたとらえ方がされて、例えば、自發性とは、働き出す機會を待つている力であるとか、場面の動きに自分から適應していくことの出来る態度とか、いろいろに定義づけられしよう。けれど、自發性の尊重が說かれるところでは、教え込んだり、教え込まれた通りに振舞わせるのではなくて、自分から進んでするように仕向けることが大切であるという。これは例外なく認められている。こうした理解の仕方には人によるずれがないと思われる。けれど、このように理解した人たちがそれでは、どのように振舞うであろうか。ここに一人の保母がいる。子どもたち

に繪をかいてもらう、リズム遊びを一よにする、その何れの場合にも自發性を尊重しなければいけないと思つてゐる。けれど、その保育の仕方には、何故か硬い所がある。たずねてみると、リズム遊びも繪のかかせ方も、自分が學んだ、殆どその通りであつた。先生にあたる人か先輩かは、その保育におしえながら、自發性を尊重するように語つていたのであろう。ノートにはそのことが書かれてゐる。けれど、この保育の振舞ひ方は、教わつた型にはまつてゐる。教える方も悪かつたのであろうが、これで果して自發性をこの保育が理解してゐるといえるだろうか。

子ども自發性を育てる仕方、つまり保育の技術的な面では、はたから教えられたままに行つて結構役立つ場合もある。例えば、子どもに出来上つたものを與えない。すると子どもは、それを完成しようとして動き出す。こうしたコツを教わつて、教わつた通りに行つても、自發性を育てることは役立つだろう。けれど、自發性の優れた教育は、自分自身が自發的に振舞える、そういう人たちにより始めて出来るに違ひない。それだから、自發性が大切であると知るだけの理解では、役に立たない。自發的に自分が振舞えるようになる、少なくとも振舞えるように努める、そこにこそ正しい理解の仕方があるのだと言えよう。

## 二

### 問題

役に立たぬ理解の仕方を、私たちは、身近かな、自發性の問題につき考へて來た。科學的な態度の重要なことや、科學的研究の必要なことの理解についても、これと同じようなことがいえる。私たちは、科學的な態度を自分のものにしなればいけないし、科學的な研究が實際に自分で出来るようにならなければ駄目である。それでは、どのように努めたらよいただろうか。

### 印象の整理

先ず以て、子どもを見る眼が出来なければいけない。見る眼をつくらねばなら

ない。それにはいろいろの仕方がある。これを書き盡すわけにはいかないが、例えばこういうようにする。

子どもたちの集まつてゐる場所、保育園や幼稚園に出掛ける。身體的發育・知的、情的、社會的發達の四項目に區分した紙を用意して、子どもたちの觀察を始める。年令だけは豫め書類か先生にきくなどで調べておく方がよい。各項目に、上・中上・中・中下・下の何れかを記入して行く。これとは違う符號を使つても、横線を五分分して、プラス2と1と0と、マイナスの1と2の段階をきめ、その何れかに位置づけをする仕方でもよい。第一回目は、第一印象が確かかどうかを主として見るつもりである。次の回には第一印象とのずれを問題にする。觀察の結果と、その子どもたちを永らく手掛けた人たちの意見とを、照し合わせる。新入園の子どもたちについて、同じような仕方でも觀察をするのもよいであろう。同僚の同志で結果を比較し合う。觀察結果と精神發達検査結果とを比較してみる。社會性の發達しているため、その子を、知

的にも優れているかのように見過つていたことが分つたりするかも知れない。繰返し試みるうちには、自分のくせに氣づき、觀察の要領が呑み込めてくるだろう。そうして、知らぬ間に觀察眼が養われる。

### 觀察のコツ

私たちは、欲求の在り方とか、行動の方向性とか、場面の要求性といわれるものに注意しなければならぬ。

往來を歩くと、今日は何時よりも人通りが繁しい。始めの中は、自分に向つて来る者と自分と同じ方向に歩いている者ところが、半々のように感じられていた。ところが、しばらくすると、殆どの者が自分と同じ方向へ歩いてゐる。自分が今では人の流れに乗つてゐることを氣づく。この流れには方向性がある。それは、シールズ對オール日本戦をみにいく野球ファンの群であつた。同じような動きを映畫館の前でも見出すことがある。人々が次々と入口に吸われていく。そこには方向のはつきりしている流れがある。流

れに乗つた人々の行動にも、方向性がある。しかし、流れから離れてそれを觀察してゐると、映畫館が人々を引きずり込んでゐるように見える。觀客の中につられて入つた者もいるに違ひない。そのように振舞うことを場面が要求してゐるといえる。子どもたちの觀察に當つても、このことの理解が先だつていなければならぬ。

二人乗りのブランコがある。一人の子どもが乗つてゐる。思うように動かすことが出来ない。ブランコのかたわらでは二人の子どもが繩の兩はじを持つて、波のようにゆすつてゐる。このような場面は、相乗りする子どもや、繩をとぶ子どもたちを、要求してゐるということが出来る。私たちは、このような場面の性質を見抜いて、これがどう變化していくかを見きわめる必要がある。

子どもたちの行動を觀察するときは、特にその眼に注意しよう。その眼が何處を見てゐるだろうか。その子が何に向つてゐるだろうか。私たちは、その子の抱いてゐる欲求の在り方や強さを見抜くこ

とに、心掛けねばならない。

行動には、その起り始めがあり、中間があり、終りがある。このことも頭において觀察しよう。例えば、ままごと遊びやターザンごっこ・喧嘩などについても、始めと中間と終りのあることを考へながら觀察する必要がある。けれど、ままごと遊び・ターザンごっこ・喧嘩という別々な三つの行動とみて、その夫々につき始めと中間と終りとを問題する方が當を得てゐる場合もある。

一人の男子が、女の子にまじつて遊んでいた。ところが、そのうちにままごと遊びが始まり、女の子同志の結びつきが強くなつて、男の子はのけものにされ勝ちになる。男の子は何とかがして仲間にはいろうとし、木の葉を集めて來たり、お父さんの役をかつて出たりするけれど、思うようにいかない。こうした氣持、みたされぬ欲求は、どこかに吐け口を探す。そこで、男の子は、周圍に眼をやる。自分より少し上の男の子たちが、ターザンごっこをしてゐる。その中間入りをする

のだが、始めから上の子たちはこの子を味そツかすにしている。その子がターザンの呼び聲をまねしてみたところで、誰も相手にしない。その子はいらいらしってくる。欲求がみたされず、緊張は一そう高まり、どこかで解消しようとする。たまたまその子より年少の男の子が砂場で玉ころがしをしていて、その玉をいきなり取つて走り出す。取られた子どもが後を追う、そこで喧嘩が始まつた。その子は、玉を自分のものにして砂遊びをしようとしたのではなかつた。高まつた緊張がそこに吐け口を見つけたのであつて、その場合の行動は、決つた方向をもつて始まつたのではない。玉を取ることが、砂場の山を崩すことやままと遊びのじやまをして、使つてゐるごまを引きずることに代つても、餘り不都合ではなかつたように思われる。情緒的といわれる行動は、このような方向の定まらぬ行動である。この場合、喧嘩だけを切り離してとらえても、喧嘩の意味を知ることとは出来ぬ。それだから、始めとその経過と終りとをみるにしても、それを含むより

全體的な動きを見落さないようにする。これが望ましい観察である。けれど、初めから上手に出来るものではないから、喧嘩なら喧嘩、ままと遊びならままと遊びという、はつきりしているものについて、とにかく観察をする。始めと中間と終りを考えながら、ありのまま、見えるままをとらえていく。それが出来たら、ままと遊びや喧嘩の始まつた一ツ前の行動を思い浮べてみる。それから、ままとや喧嘩のあとがどのようにのびていくか、その次に起る行動とのつながりを見る。このようにして段々と望ましい観察の態度に近づくことが出来よう。

### 三

#### 問題

観察は、研究をどのように進めるにしろ、その基礎になる。それだから、印象の整理や観察のコツについて述べたのだが、観察にしろ實驗にしろ、その仕方は、研究の目的によつて左右される。従つてその目的につき考える必要が次に起つてくる。

#### 問題の發見

研究の目的は、保育の實際から生れる。例えば、この子は嘘つきで仕方がない。この子は繪をかきたがらない。この子は喧嘩早くて困る。このような事情が、研究を促す。この子は歌覚えがよい。この子は、紙芝居を一度みて、次には始と間違ひなく自分ですることが出来る。これらのことも、研究のきツかけになる。けれど、研究の根本には、「疑問」を抱くこと、どうしてなのかと問う態度がなければならぬ。それによつて、研究の問題が見出され、目的にそう研究も進めることが出来る。

問題がどこにあるか。それにつき努めて考えよう。そうでないと、私たちは安易に時を過ごしてしまふ。例えば、ここに嘘をついて仕方のない子どもがいる。これをとらえて問題にしなれば、仕方がない仕方がないで、幼児期がすんでしまふ。これで重荷がおりたと、大變無責任な考えを抱く人もいなくなるが、こうした過ちを知らずに犯している場合は意

外に多い。私たちは、嘘つきをなおすために、どうして嘘をつくのか、その条件を分析しなければならぬ。(條件分析の仕方は、更めて問題にする。)

次には、問題に導かれてする問題の発見について述べよう。それには、これ迄に研究されている事柄が、私たちの身近かの子どもにも當てはまるか、調べてみる。描畫の發達でも、反抗現象でも構わない。この場合、大體の傾向は一致しても、當てはまらぬものが出てくる。この當てはまらぬものを、例外としてのけずりに取り上げる。このことが問題の発見であり研究の望ましい態度である。つまり法則的な事柄を、個々の場合に當てがう。そこに、當てはまらぬものが出てくる。これを問題にして研究を進める。そうして、前よりもっと法則的な事柄を見出す。それを又、個々の場合に當てがつてみるといつた進み方が、問題に導かれてする研究の仕方である。これは、幼児研究に限らず、科學全般に通じる研究の進め方であることを、ここに注意しておこう。

最後に、従來の研究を一べつし、この稿を終えたい。幼児(兒童)心理學の發達は、極く少數の子どもたち一人一人に於いての丹念な觀察記録にあずかるところが多かつた。ブライエルがその子について、シュテルンがその娘について、我が國では、久保良英氏が同じような觀察記録をのこしているなど。このような記録は、しかし、父と子・母と子というような關係にないと、容易には出來ないし、研究者たちが、數多くの材料によつて結果を出そうとする目的には、不向きである。けれど、觀察記録の仕方は日記式で大してむづかしいものではないから、お母様方の心掛けがよく、研究の目的をはずきりつかんで試みれば、今後とも優れた結果を期待出來よう。(その仕方については別の機會に述べる。)子どもの發達の一般的な傾向については、研究所や幼稚園その他の施設における觀察及び實驗が、多くのことを明かにした。けれど、これ迄の研究では、外來の研究者によつて、比較的短い時間起ることを數多く集め

る仕方がとられ勝ちで、一人一人の子どもの發達を縦にみる仕方からは、可成り隔つていた。そこで、縦の見方も横の見方も兼ね備えて、これ迄の研究に缺けているところを補おうとすれば、子どもたちが繼續的に集る所で、生活をする人たち、つまり、保育園や幼稚園に働く人たちにも多くを期待しなければならぬ。この人たちが、研究の仕方を身につけて組織的に協力出來れば、すばらしい成果のあることに間違ひはない。保育連合會はこのことにも盡す使命を持つていたのであろう。保育園・幼稚園が一ツになり、**幼児園關係者**たちが共通の問題をとらえて研究をする。「**幼児の教育**」は、この研究を促進し、廣く研究狀況を知らせ、次々と新しい研究を導くものにも、重要な任務を感じていることであらう。私も、そのことに少しでも役立ちたい目的で、筆を運んでいる。

お断り——山下俊郎先生の「**幼児の心理的發達**」は都合により  
今月は休みます